

長編ドキュメンタリー映画
大西暢夫監督作品



炎はつなぐ

ゆらぐ和ろうそくの炎は、消えて土に還り、
そしてまた灯る ——

10/31 (土)

大西暢夫監督、再び真庭に!



監督:大西暢夫 | 撮影:大西暢夫、今井友樹 | 編集:清野英樹 | 整音:永濱清二 | グレーディング:辻智彦 | 音楽:宗次郎 sojiro | スチール:大西暢夫 | ナレーション:大西暢夫 | プロデューサー:山上徹二郎

製作・配給:シグロ | 宣伝:プライトホース・フィルム [2025年/日本/ドキュメンタリー/122分]

知られざる職人の技を求めて、写真家・大西暢夫が全国を駆け巡った旅の記録

1本の和ろうそくができるまでには 全国の職人たちの技があった。 様々な技術が繋がっていく果てに 灯る炎のゆらぎの意味とは？

本作は、写真家としてこれまで二十数冊の写真集や著書を出版し、『水になった村』『オキナワへいこう』などのドキュメンタリー映画を製作・監督してきた大西暢夫の長編ドキュメンタリー映画の最新作になる。

ライフワークとして15年以上にわたり取材を続けてきた日本全国150カ所以上の職人たち中から30カ所に絞り込み長期取材を敢行、最終的に14の職人たちの技を映画にまとめた。

蠟の原料となるハゼの実を収穫するちぎりこさん、灯芯草から髓を抜く灯芯引き、灯芯を燃やして煤を集め墨を作る煤職人ほか木蠟職人、藍染職人、^{すくも}染職人などの手を経て集められた材料を使い1本の和ろうそくができる。日本の技術と文化を支えてきた伝統工芸の技が、謎解きのようにつながり、最後に和ろうそくの炎のゆらぎの意味が明かされる。



職人さんたちの手先を何度か見ていけば、何をどのようにしているのかわかってくるが、しかし使われている材料がわからないから、取材が行き詰まる。

和紙の原料はどこにあり、何をどうしているのか、藍染の原料の^{すくも}染はどうやって作るのか、真綿は植物の綿ではなく動物性だったとか、墨は煤を固めたものからできているとか。

僕は完成品しか知らなかったのだ。

好奇心が刺激され、原料を収穫する人や、加工する職人に会いに行くが、こだわりがすごい。さらに捨てるものが出てこない。そういう職人がいてくれたことで、僕たちは本物に出会えている。一つ一つのものが完成するまでに、多くの職人たちが関わっていることを知り、追いかけて始めたら止まらなくなった。それぞれの集合体が和ろうそくになった。僕たちは100年前と同じ炎を見ることができているのだ。

——大西暢夫



炎はつなぐ

監督：大西暢夫
撮影：大西暢夫、今井友樹
編集：清野英樹
整音：永濱清二
グレーディング：辻智彦
音楽：宗次郎 sojiro
スチール：大西暢夫
ナレーション：大西暢夫
プロデューサー：山上徹二郎
製作・配給：シグロ
宣伝：ブライトホース・フィルム

〔2025年／日本／ドキュメンタリー／122分〕
© 2025 シグロ/大西暢夫

10月31日(土) ① 9:30～ ② 14:00～

真庭市立中央図書館 3F シアター 参加費無料 定員 52 名

申込方法：中央図書館（0867-44-2012）へ来館、電話、申込みフォームで→

各回上映後に大西監督に
お話いただきます。

